

# 周作人の初期児童文学研究における日本からの影響

鄭 恵

キーワード: 児童本位 児童文学 ヒューマニズム思想 人情 趣味

## はじめに

周作人の1920年の講演「児童の文学」には「人の文学」(1918.12)や「平民の文学」(1919.1)につながる、周のヒューマニズム思想の形成過程が窺える。そこでは「児童は独立した存在であり、その内と外両面の生活を有している」とされ、「児童本位」思想が明確に呈示されている。児童の内面即ち心理的、精神的発達を強調し、児童の個性を重視することは周作人の「児童本位」の重要な観点である。この観点が日本文学からの影響をどのように受け入れたのかを探るために、本稿は周作人の初期の児童文学研究を中心に考察したい。

## 先行研究

周作人の「児童本位」の児童観についての研究は少なくない。その中で陳泳超の「周作人的児童文学研究」<sup>1)</sup>は周作人が強い関心を示したアンドルー・ラングの文化人類学と彼の児童文学研究との関連に焦点をあてて詳しく考察しているが、日本の影響及び周の「児童本位」の意味内容には全く言及していない。

これに対して、紹興時期だけに焦点を当てた李瑾の「紹興時代の周作人の児童観」<sup>2)</sup>は紹興時代の周作人の生活や文学活動などを考察し、当時の日本の児童学の状況及びその影響力についても考慮に入れて彼の児童観を探っている。ここでは周の論述テーマの推移が時間軸に沿って綿密に分析されているが、「周作人は児童を客観的に理解し、その心理面と生理上の需要に応じて教育を行うべきだと主張した。つまり、児童教育は児童本位に行わなければならないということである。そのうえ、児童教育における児童文学の重要性についても独自の論理を展開した」という結論するのみで、周の児童文学に潜む日本文化要素と彼の「児童本位」思想との具体的な繋がりにまで立ち入った考察はない。

また、劉軍も紹興時期の周作人の児童研究に関してかなり詳しく検証しており<sup>3)</sup>、特に日本の影響について日本の知識人との関連を個々に論じている。た

たとえば、周に大きな影響を与えた日本的要素「人情」、「趣味」も考察しているが、周作人の「児童文学」観との関係について綿密に検討しているとは言えない。

さらに、潘秀蓉<sup>4</sup>は周作人の日本古典の翻訳紹介を中心に、周作人の日本文化の受容について研究しており、「人情」などの日本文化要素に論及しているが、周の全体的な文学観を論じており、児童文学に関しては詳しく言及していない。

これらの周作人研究は、周の文学論における日本からの影響として「人情」や「趣味」という言葉の意味内容に深く踏み込んで究明していない。共通の漢字が使われた語彙であるため、多くの研究者はその日中における意味の差異を看過したのではないかと考えられる。そのため、日本的要素の意味内容を確認した上で、これらの要素が周の「児童本位」児童文学思想の成立にどのような影響を与えたのかを考察してみたい。

## 1. 周作人の児童文学観における「児童本位」とは

周作人は 1911 年に日本留学を終え、故郷紹興に戻った。そこで彼が直面したのは脆弱な中華民国政府の新体制であった。周の政治への情熱はすぐに冷め、彼の従来の関心や彼自身の家庭的事情、そして職業上の必要により、児童についての研究が始まった。周がこの時期に発表した児童に関する文章には「個性之教育」(1912.11)、「児童問題之初解」(1912.11)、「遺伝与教育」(1913.10)、「民種改良之教育」(1913.10)、「児童研究導言」(1913.12)などがあり、家庭教育については「家庭教育一論」(1912.12)、児童文学については「童話研究」(1913.8)、「童話略論」(1913.11)、「兒歌之研究」(1914.1)、「童話積義」(1914.4)、「古童話積義」(1914.6)など、さらに「遊戯与教育」(1913.11)、「玩具研究一」(1914.2)、「玩具研究二」(1914.2)、「小兒争鬪之研究」(1914.2)などの児童の遊びに関するものがあつた。以上の各ジャンルの児童研究において、彼の「児童本位」の児童観が明確に顕われている。

児童の「個性」を尊重するという周作人の「児童本位」の観点は帰国後最初に発表した「個性之教育」(1912.11)にすでに存在していた。周は人の個性が遺伝と周囲の環境によって形成されると説明しており、「個性」とは児童本来の性格で、学校教育は児童の品性を成長させる外因にすぎないという。その翌月に発表した「家庭教育一論」(1912.12)においても彼は「個性」に言及している。「個性の差異は遺伝によるし、家族の影響によって形成されていく。故に性格を形成する際、重要なのは家庭だ。その次は教育だ」<sup>5</sup>と周は述べて、個々の児童は天性を有し、独立した人格を持つ人間であると理解したうえで、

彼の「家庭教育」を重視する児童教育理念を唱導している。児童の「個性」の尊重に基づく教育を論じると同時に、彼は児童の精神世界を充実させるために、「童話研究」、「童話略論」などの児童文学研究を併せて展開していたのである。

「童話研究」において、周作人はアンドルー・ラングの文化人類学に拠って童話出自はサガにあり、サガでは時間、場所、人物が定まっているのに対して、童話はそれがはっきりしないだけであると述べている。また、周は「童話（及びサガ）とは原始人<sup>6</sup>の文学だ」と定義付けている。蒙昧無知の原始人が自然に接しそれに触れるとき、その初めての認識は最も直接的であり、是非もなく、恐怖の感情は感嘆に化し、本来の印象が言葉になる。そこには雅俗の別なく、祭りで先人の徳を称揚し、休閑には異聞を伝えて、それらが婦女児童の娯楽となる。祭典の荘厳と娯楽の愉快さは異なるが、真情に寄託することは共通している<sup>7</sup>と説明している。原始人の自然に対する純粋な「真情」は児童の天性と同様であり、その「真情に寄託する」ことによって童話（及びサガ）が成立したというのである。

周作人は後の「童話略論」で彼の童話研究をより全面的に論じている。この文章ではアンドルー・ラングの文化人類学を論拠として再び童話のサガ起源論に言及し、童話の分類、解釈、変遷、応用、評価、人為童話などの九項目に分けて童話の性質をまとめた。序言において、童話と神話及びサガは一体であり、神話は原始人の宗教であり、童話は伝奇を主旨として、時代、人物、場所が定まらず、娯楽を目的とする文学であると論じている。後の1922年になると周作人は童話を「原始社会の文学」<sup>8</sup>と最も簡明に定義づけている。

周作人は「童話略論」で児童教育における童話の役割について論じる際に、児童の想像力や感受性を養う機能があり、社会事情を知る手段でもあり、豊かな自然に関する知識も得ることができると述べている。この文章の中で特に注目に値するのは、「児童の自然な本性を保護し、その各段階に応じて発達させることが蒙養の最も重要な意味」であるという周作人の指摘である。つまり、児童の本来の姿、自然な精神状態を保護することが児童文学の基礎であり、その上で児童の発達段階によって児童文学を展開しなければならないのである。

周作人は同文章の「人為童話」の節で、以上の観点を基準としてアンデルセンの作品が最も優れている人為童話<sup>9</sup>だと高評している。周によれば、彼は児童の心を持っているため、「小児の目で万物を観察し、詩人の文筆で描写し、故に美妙で自然であり、神品と称す、先に古人なき、後に来者なき也」<sup>10</sup>と認めており、児童の本来の視線で児童文学を創作することで傑作が生まれると考えているのである。これに対して、オスカー・ワイルドの童話は「詩人の文学で

あり、児童の文学ではない」<sup>11</sup>と評している。

さらに、児童の自然な天性及びその本来の精神世界を非常に重視する周作人は『不思議の国のアリス』を高く評価し、児童の想像力が発達する時期には空想的作品が必要であり、大人には彼らのこの欲求を奪う権利がないと強調している<sup>12</sup>。児童の空想は児童の純粋な童心によるもので、必ずしも意味があるとは限らない。そのため、周作人は児童文学における「無意味の意味」の重要性を強調し、児童の空想を重んじている。彼は「児童的書」(1922)<sup>13</sup>で中国の教育が実用主義で教訓的傾向が強くと、児童に向かって意味があるものばかり教えるのと批判し、「無意味」の機能が児童の空想力の高まる時期に児童に愉快的生活をもたらすと説明している。

以上のように、周作人の児童文学観において、児童の目線で創作する作品や純粋な童心による空想的作品は皆読者を児童と設定し、児童の心理に近づけて創作したものである。つまり、児童の立場を取り、児童の精神世界即ち内面を重視するという「児童本位」の観点を有している。周によれば、「児童本位」によって、個々の児童の天性を守り育て、個性も自然に発展させるならば、個性を持つ大人らしい大人（「正当の人」）へと成長させることができる<sup>14</sup>。

周作人は代表作1920年の「児童的文学」で、彼の初期の児童文学研究を次のようにまとめている。児童文学は児童向けでなければならないと指摘しており、児童の精神世界は「原始人」と同様に「物神崇拝ではない人は一人もいない。草木には思想があり、猫犬は話ができることは当然だと信じている」<sup>15</sup>と説明している。つまり、児童は純粋な精神世界を有しており、児童文学は児童のために創作しなければならないと主張されている。飯倉昭平が述べたように「この『児童的文学』は、幼児期から少年期にかけてどんな読み物を与えたらいいかを、児童学と人類学の立場から説いたもので、内容的にはむしろ民国初年の諸論文に近いものであった」<sup>16</sup>。1932年になって周は『児童文学小論』を編集したが、その中に彼の初期の作品もそのまま収録している。したがって、周の児童文学に対する観点は初期から大きく変化していなかったと考えられる。

しかし、ここで注意を要するのは、周作人が文化人類学的な観点に立って、児童の精神世界は原始人と相似していると主張するのはあくまで彼の児童文学研究の論点であり、児童の個性を尊重するという彼の考え方は文化人類学の理論によるものではない。それは明治後半の日本児童教育思潮の影響を受けたものと考えられる。周作人の児童文学に関する先行研究は、文化人類学の考察に傾き、この分野における日本からの影響を看過する。他方、日本の影響を中心に考察する場合も、日本的要素が周の「児童本位」観との関連で詳しく論じていない。

周作人の児童文学研究においては、児童の個性を養成する「児童本位」観との関連で「人情」、「趣味」という日本的要素がしばしば言及されている。本論文は当時の日本の児童教育思潮を考慮したうえで、これらの要素と周の「児童本位」思想との内的な繋がりを考察したい。

## 2. 日本の児童文学の動向について

周作人は明治末期の1906年から1911年まで日本に滞在していた。日本では明治20年代になって、明治天皇制国家の政治体制が確立され、経済的にも資本主義体制の基盤が次第に整備された。教育においても小学校令の公布によって、義務教育が普及していった。これにともなって、家庭教育への関心が次第に高まり、欧米の個人主義思想、教育思想が紹介され、旧来の伝統的な家庭教育の理念から児童の人格・個性を尊重する理念へと教育思想の動向が変化していった。つまり、周作人が日本に滞在した時期は児童の個性を尊重する近代的家庭教育理念が日本社会に浸透しはじめ、児童の身体的な世話だけでなく、心理的、精神的発達にも配慮することが要求されるようになった。

明治後半から「家庭教育」に関する書籍が数多く出版された<sup>17</sup>。高島平三郎の著作『児童を謳える文学』（1910、明治43年）もその一つであり、周作人はこの本を日本に滞在中読んだと述べている。高島は当時日本の教育界でも非常に大きな影響力を有しており、『家庭教育講話』（1903、明治36年）や『家庭及び家庭の教育』（1912、明治45年）等の数多くの著作があった。周作人は回想で高島の『児童を謳える文学』と『児童研究』を読んだと記しているが<sup>18</sup>、高島の他の著作群にどれだけ触れていたかは分らない。

その一方、児童の心理的、精神的発達をもたらすために、家庭教育の責任を担う母親は何を教えるべきか、つまり教材の問題が浮上してきた。絵本やお話の読み聞かせや歌い聞かせの教材が必要となり、伝統的な口承文学を再話する巖谷小波の「御伽噺」をめぐる文筆活動が注目されるようになった。

たとえば、『朝日新聞』には明治29年（1896）から、御伽噺に関する記事が続々と掲載されており、巖谷小波の著作も広告欄に宣伝されている。大正時代に入る直前の1911年12月つまり周が帰国した直後には、「民間伝説及童話募集」の記事が出され、その後「民間伝説及童話」というコラムが設けられるようになっていく。『読売新聞』も明治31年（1898）から巖谷小波の御伽噺に関する広告がしばしば見られ、大正元年の1912年4月には「家庭童話」というコラムが設けられるようになった。明治後半に一世を風靡した「御伽噺」は次第に「童話」へと変化していった<sup>19</sup>。つまり、周作人が留学していた時期は、明治の「御

伽喃」時代から大正の「童話」時代への過渡期であった<sup>20</sup>。周は帰国後も『朝日新聞』を購読していたため<sup>21</sup>、大正期における日本の児童文学の発展動向を追っていたはずである。したがって、日本通の周作人は当時の児童の個性を尊重する児童教育理念が徐々に高まっていた日本を目撃し、日本児童文学の開花もよく認識していた。

### 3. 高島の『児童を謳える文学』から一茶へ

高島の『児童を謳える文学』は明治43年に出版されており、周作人が日本に居た最後の年に購入した本である。彼はこの著作を読んで児童文学に関心を持ち始めたと述べている<sup>22</sup>。

『児童を謳える文学』は和歌、俳句、川柳、俗謡、俚諺、随筆に分けて、そこに現れた児童に関する文章を抽出し、編纂した本である。高島が参照した書物には『古事記』、『日本書記』、『万葉集』、『二十一代集』、『日本文学全書』、『群書類従』、『日本歌学全書』、『俳諧文庫』、『洞観集』、『俳風柳多留』、『吾我吟集』、『和漢古諺』、『野語述説』、『俚言集覧』、『本朝俚諺草』、『毛吹草』、『童子訓』などがあり、日本の主たる古典を総覧したといえる<sup>23</sup>。

高島のこの著書に影響を受けた周作人は、帰国後、高島に学んで中国文学史を辿り、児童に関する文学資料を整理して、「童話積義」(1914.4)、「古童話積義」(1914.6)を発表した。そこには「虎のおばあちゃん」、「虎が『漏』を怖がる」、「化け虎」、「弟と兄」、「ずるい鹿」などの古代童話が収録されている。そのような過程を経て、彼の児童文学への関心は五四運動時期の民謡収集運動にまで及んだのである。

周作人はこの高島の本を愛読し、ずっと書斎の本棚に置いていた<sup>24</sup>。さらに彼はこの本のタイトルを「歌詠児童的文学」(1923.2)<sup>25</sup>と中国語に訳し、この著書の内容を紹介した。ここでは、高島がその序で指摘した日中の児童文学の相違点をそのまま中国語に翻訳して引用している。

支那においては子供に重きを置かぬ点からと詩歌の性質がただ風流ということを主としたという点から子供などを謳うことが少なかったのであるが、我国ではあまりに愛するがため、之を実成から抽象することが難しかったのであろう。勿論支那の文学は大に我国に影響しているから、支那風の思想及び詩歌の性質より子供を謳うことが少なかったこともあろう。しかしこの影響は和歌や俳句には極めて少ないことと思う<sup>26</sup>。

周作人はこの高島の考えに賛同し、中国においては児童及び文学の観念が古いために児童文学が欠如していると考えている。この高島の説に衝撃を受けた周は本格的に児童文学研究に取り組む決心をしたのだと思われる。また、この著作をきっかけとして、周の日本人に関する文章群の中には、中国古典文学に比して活気のある和歌、俳諧などの日本文学への強い関心が示されるようになる。俳諧師の小林一茶の作品もその一つであった。

周作人によると、小林一茶への関心はこの『児童を謳える文学』により引き出された。一茶の作品はこの著作に収録された俳句のなかでは最も多い。周は「俺の春天」(1923. 2)で、一茶の『おらが春』(周はこの中国語訳をこの文章のタイトルにしている)を紹介する際に、高島の『児童を謳える文学』には一茶の児童に関する描写が含まれているが、全部ではなかったので、「中村編の『一茶選集』<sup>27</sup>を読んだ」と述べている<sup>28</sup>。周作人はすでに1921年11月の『小説月報』に「一茶的詩」と題して一茶の生涯、俳句の特色を詳しく紹介している。さらに韓玲姫によると、周は1922年から1934年までの13年間に一茶に関する図書を23冊も購入するほど一茶に強い関心を示していた<sup>29</sup>。

#### 4. 小林一茶の「人情」について

周作人は1916年に「日本之俳句」<sup>30</sup>(1916. 6)で、「俳句において芭蕉及び無村の作品が最も優れているが、ただ余は一茶の文を最も好んでいる。彼の多くの作品における人情と物理の描写が極めて巧妙なのだ」<sup>31</sup>と一茶への関心を明言しており、その作品に潜在する日本的要素としてとりわけ「人情」を提出した。また、彼は「一茶的詩」(1921. 11)で一茶の文学的特徴を論じる際にも、「彼の俳諧は人情であり、彼の冷笑の内には熱い涙が含まれている。強いものへの反抗と、弱いものへの同情がすべてこの文章にある」<sup>32</sup>と感銘して述べている。

周知のように一茶の生涯は不幸が多く、三人の妻から何人かの子供を授かったが、皆幼くして死に、一人しか残らなかった。彼は弱小なものに常々同情しており、渡邊弘の研究によれば、一茶の生涯の作品には児童を素材とする俳句が非常に多い<sup>33</sup>。そのため、高島の『児童を謳える文学』には一茶の作品も多数採録されており、周作人の関心を引いたのである。周は彼の『おらが春』の中で一茶の愛娘「さと」に関する描写を中国語に訳して読者に紹介している。一茶の原文は次のように書いている。

こぞの夏、竹植る日のころ、うき節茂きうき世に生まれたる娘、おろか

にしてものにさとかれとて、名をそととよぶ。ことし誕生日祝ふころほひより、てうちてうちあは、天窓てんてん、かぶりかぶりふりながら、おなじ子どもの風車といふものをもてるを、しきりにほしがりにてむづかれば、とみにとらせけるを、むしゃむしゃしゃぶって捨て、露程の執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打ち破りつつ、それもただちにあきて、障子のうす紙をめりめりむしるに、よくしたよくしたとほむれば誠と思ひ、くあらきやら笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一点の塵もなく、名月のきらきらして清く見ゆれば、跡なき俳優見るやうに、なかなかの心の皺を伸しぬ。又人の来りて、わんわんはどこにといへば、犬に指し、かあかあはと問へば鳥にゆびさすさま、口もとより爪先迄愛嬌こぼれてあいらしく、いはば春の初草に胡蝶の戯るるよりもやさしくなん覺へ侍る<sup>34</sup>。

児童の健やかで天真爛漫な姿をそのまま描写し、我が子を愛する父親としての素朴な気持ちを読者に感じさせる。周は、一茶の文章は唯一無二のものであり、天真爛漫な稚気があり、強情で無茶するところもあり、子供っぽさがあると評している<sup>35</sup>。

「人情」という日本語には大きく分けて、「人間の自然な心の動き、人間のありのままの情感」と「人としての情け、他人への思いやり」の二つの意味があるが<sup>36</sup>、周作人の言う「人情」とは前者と後者を融合した意味であり、人間としての感情をそのまま表現することであろう。一茶の「人情」観即ち父親としての自然な愛情表現は、まさに日本人はありのままの児童を愛する感情が強いという高島の主張を裏付けており、前述した周のアンデルセンに対する評価に近い。つまり、児童の心理をよく感知し、自身も児童のような作家として、周は一茶を評価している。上に引用した一茶の文章に現れているような児童の内面生活を重視する観点が、周作人の児童文学観に合致しているのである。「子供」だけでなく、大自然の弱い生き物に対する一茶の観察と描写も周作人に注目されていた。たとえば、周の「蒼蠅」（1924.7）は一茶の「蠅」に関する俳句を収録し、一茶に共感している。

このように人間の自然な感情を重んじるという日本人独特の「人情」が、周作人の注意を引いたのだと考えられる。勿論、周作人は日本通の読書家として日本の各ジャンルの文学を取り入れ、翻訳した。たとえば、高島の『児童を謳える文学』を紹介する際にも、清少納言の『枕草子』の第一百五十一段<sup>37</sup>「うつくしきもの」を抽出して訳し、1920年代には日本の「俗歌」の紹介や訳<sup>38</sup>、『徒然草』の訳<sup>39</sup>、狂言の訳<sup>40</sup>なども行っている<sup>41</sup>。周はこれらの諸文学作品の翻



訳に際して常に「人情」に言及しているわけではないが、常に人間の喜び、憂慮、欲情などの自然な感情を表現するという共通点を見出していたのである。また、後の1936年に柳田國男の「小さき者の声」を紹介する<sup>42</sup>際にも、柳田の文章には民俗学者の関心だけでなく、人情も満ちている<sup>43</sup>と評し、「柳田の児童と農民への感情は誰よりも強く、彼の同情と憂慮は確かなものだと分かる」<sup>44</sup>と共感を示した。

「日本的人情美」(1925.1)<sup>45</sup>でも、日本人の国民性として「忠」を強調する内藤湖南や辜鴻銘など<sup>46</sup>の日中知識人たちに対して、周作人は専ら「人情」を強調している。彼は和辻哲郎の『古代日本文化』に見える『古事記』に関する感想を引用し、日本の国民性の長所は「人情に富む」ことだと述べている。周は自然な人間的感情で児童、動物、植物など自然の中の生き物たちの美しさを賛美することを「美への愛好」<sup>47</sup>と呼び、この「美への愛好」は中国に欠如するものであり、このような国民性を持つ日本を「小ギリシア」と常に喩えていた。

以上に述べたように、周作人の「児童本位」の児童文学観において、この「人情」は児童を小動物のように大自然の一部として愛する情感であり、児童の純粋な天性を賛美する表現でもある。したがって、児童の天性も大自然から授かった恵みであり、児童の個性を愛して発達させることが周の「児童本位」の根本をなしている。周は「人間本位」を主張する代表作「人的文学」(1918.12)で「われわれは人は一種の生物であり、その生活現象は、他の動物と何も変わってはいないと認める。だからわれわれは人の一さいの生活本能は、すべて美であり善であって、完全に充足されねばならないと信じる」<sup>48</sup>と述べているが、児童の天性は人間が成長する最初の段階における本能の表現であり、美善の存在でもある。「児童本位」は周のヒューマニズム思想の中核を形成する「人間本位」の重要な一環と考えられているのである。

## 5. 周作人の「趣味」について

周作人の文学観の中でもう一つの重要な要素は「趣味」である。では、彼の「児童本位」の児童文学観の中で「趣味」はどのような意味をもつのだろうか。

1913年に周作人は「遊戯と教育」を発表し、黒田鵬心<sup>49</sup>の「遊戯と教育」<sup>50</sup>を翻訳・解説した。この論は「美育」<sup>51</sup>を「趣味の教育」と理解し、児童は遊戯即ち趣味の世界で美の教養を自然に育てていくという理想を述べている。後年出版された『人生と趣味』(1920年)<sup>52</sup>でも黒田は児童教育における趣味教育の重要性を強調しており、児童の各年齢層に応じた趣味教育を実施すべきだ

と提唱している。黒田はこの著作で「趣味」の意味の由来を英語の「Taste」によって説明し、物の味を「味わう」という食慾から、視聴二覚の「美慾」に発達してきたとして、趣味の世界は「無邪気な世界」だと述べている。

黒田の説明に対して、周作人が理解している趣味には更に深い意味がある。「私は趣味を重んじ、これは美であり、善でもあると考え、無趣味なことは大悪事だと考えている。ここで言った趣味には雅、素朴、渋さ、温和、清朗、通達、中庸、選択など沢山の内容が含まれているが、これらのものと反対なものは無趣味なものだと見なす」<sup>53</sup>と「趣味」の意味を現代日本語の「趣味」から大きく拡張している。それは「情趣」、「美しさ」などの意味に近く、「人情」を重んじヒューマニズムを重んじる彼の美意識と関わっている。したがって、周のいう「趣味」はより広い意味で理解する必要がある<sup>54</sup>。

### 5.1 児童文学における「趣味」

周作人が著した「関与児童的書」(1923.8)によると、彼は靈魂信仰や帝王の起源などから良い物語が生まれること、子供はその物語から趣味と実益を得ること(原文：得趣味和実益)を確信している<sup>55</sup>。周がここで言う「趣味」とは「おもしろさ」の意味だと考えられる。また、周作人は児童向けの出版物の良し悪しについて常々彼自身の子供の意見を聞いていた。「あまり読みたくない。——題目が分からなくて、趣味がない(原文：没趣味)」<sup>56</sup>という子供の答えもこの文章に記されている。したがって、児童文学における「趣味」とは児童の判断を基準とするもので、主に「おもしろさ」を意味していると考えられる。

また、「児童劇」(1923)で周作人は坪内逍遙の『家庭用児童劇』を論じる際に「とても趣味がある(原文：很有趣味)と思う。中国にもこのような本が出てほしい。家庭及び学校に提供してほしい。」<sup>57</sup>と述べている。この著書には坪内が創作した「狐と鴉」や「メレー婆さんと其飼犬ポチ」など12篇の児童劇が含まれており、キャラクターの仮面などの制作も図で説明している。周作人が評価する「趣味」がこの児童劇に如何に表現されているかを「狐と鴉」をとりあげて探してみたい。それは次のような話である。

一羽の鴉が食べ残した弁当を見つけて、木の枝から飛び下りて食べに行く。最後に残った大きな蒲鉾をもって帰ろうと思っていると、通りかかった狐もそれを見つめる。狐が取ろうとする時に鴉は素早くそれを銜えてもとの木の枝へ飛び上がった。そこで、狐は鴉の歌声を褒め上げて、歌わせようとした。鴉が狐のお世辞にのって、歌い始めたとなんに蒲鉾は地面に落ちた。狐はこれを取って去り、鴉は騙されたことを知った。

簡単な言葉のやりとりによる分かり易い物語で、狐が鴉を騙すことを通じて

狐の狡猾さ、鴉の虚栄心への風刺などから「趣味」が引き出される。このような児童劇は周作人にとって非常に新鮮であった。彼は子ども時代に見た劇から受けたショックを回想し、初めて読んだ坪内の児童劇を「很有趣味」と高く評価した。さらに「理想的な児童劇は当然児童自ら創作し演じるものだが、ただし二三冊の参考用の説明書が欠かせない。これによって大人たちに具体的な説明を与え、彼らが正しく理解できるようにすることが最も重要だ。」<sup>58</sup>と中国の実情に応じて自分の意見も提出している。

坪内は『家庭用児童劇』の序で「ここに載せた十二の作は、家の中で、子供たち自身が、家の人達や友達に見せるためにやる劇の台帳です」とはっきり「児童劇」の主演者を児童自身に定めている。したがって、児童にとって台本は簡単で、面白いものが要求される。児童によって演じられ、観賞者も家族や児童であり、児童の視点に立って創作されるという点で、まさしく「児童本位」の劇ともいえる。周作人がここで言う「趣味」とは児童自身が判断した台本のおもしろさである。この「趣味」の観点から周は、坪内の言う「芸術的本能を善導して子供の心性を満遍なく多方面に、自然に且つ円満に啓発し、撫育し、陶冶しよう」<sup>59</sup>という児童劇の「主眼」に同意しているのである。このようなおもしろい作品には教訓の意味は弱く、つまり「無意味の意味」の中で児童は鴉や狐など動物の特徴を理解し、おもしろさを体験する中で児童の「趣味」が育っていくことにより、「趣味の教育」が成り立つのである。

## 5.2 日本文学における「趣味」

一方、前節にも論じたように、周作人にとって、「趣味」は広く深い意味内容を持ち、日本文学の諸ジャンルにはそれぞれの「趣味」がある。たとえば、『徒然草』の趣味は「温潤」<sup>60</sup>にあり、芭蕉の俳句には「幽玄と寂び」<sup>61</sup>の「趣味」がある。さらに、江戸文化に親しい周作人は江戸の「滑稽本」の「趣味」を「ユーモア」という意味として取り入れた<sup>62</sup>。

このように、周の独特な「趣味」の意味内容には日本文学に現れた「わび」、「さび」、「ユーモア」などの文学特色も含まれている。これに対して、周の児童文学観における「趣味」とは「おもしろさ」が主な要素で、ここではとくに「無意味の意味」が重視される。このような「趣味」によって、児童はその天性を保護し、健康な個性を養うことができるのである。とはいえ、周作人の文学思想の中で「趣味」という用語の意味ははっきり二重化しておらず、以上述べた個々の意味を融合させたひとつの理念である。彼はこのような「趣味」は中国古典文学に欠如するものだと考えているが、少なくとも「おもしろさ」に富む児童文学というジャンルが中国のそれまでの文学に欠如していたことは事

実であろう。

## 6. 児童教育における児童文学の機能について

前述したように、周作人は初期の「童話研究」、「童話略論」、「童話釈義」などで、児童の啓蒙教育における童話の重要性に言及している。周は「童話の児童教育の上に及ぼす作用は、文学的であって道徳的ではないということ信じ」<sup>63</sup>ており、順服な国民ではなく、個性がある「正当な『人』になるよう児童を養成すること」<sup>64</sup>が彼の理想であった。

帰国後の周作人は中華民国の新体制の脆弱と民族復興の緊迫感を敏感に感じとった。旧式知識人の士大夫精神は彼を動かす無意識な原動力となり、健康な国民を育成するためにどうすればよいか自然に彼の課題となった。李瑾が述べているように、周作人は「国民」を育てるために、「児童教育と民族の盛衰を結びつけた」<sup>65</sup>。周によると、将来、民族復興の重責を担う児童を健康な国民として育成するためには、児童の段階から「人」として正当に認めなければならない。したがって、児童教育における児童の「個性」の尊重、児童の精神生活の重視が次第に彼の研究課題になったのである。

児童の「個性」や精神世界を重視することは、大人が如何なる目線で児童を見るかに関わっている。周作人は文化人類学の視点から児童文学研究に取り組むだけでなく、親が児童の立場に立って彼を愛するようにと提唱した。彼は「児童問題之初解」で「従来父子の倫理は天性によるものであるが、これらが対等でありながら調和しているからこそ、よい関係になる」<sup>66</sup>と述べている。中国の封建的家父長制家族においては、親は自分自身を「本位」とし、児童は所有物と考えており、児童の身体的世話だけを義務として、彼の精神世界については配慮してこなかった。したがって、そこでは「子供に重きを置かぬ点からと詩歌の性質がただ風流ということを主としたという点から」<sup>67</sup>文学に活気がなく、児童文学が欠如していたのである。

前述したように、周は日本留学中に会った高島の児童文学に関する日中比較論から大きく目を開かれて、日本文学の「人情」、「趣味」の要素を発見し、一茶の児童を愛する目で児童を描写する文学や坪内のように児童を「自然にかつ円満に啓発し、撫育し、陶冶」する作品を作ることを中国の児童教育の急務だと考えた。周によると、児童の個性を重視する児童教育において、児童文学は大きな役割を果たす<sup>68</sup>。つまり、児童文学を通じて、児童の天性はその成長期に応じて自由に発達させることができるからである。この思想の主眼は「家長本位」ではなく、「児童本位」である。この「児童本位」思想は当時の封建的

家父長制家族を基盤とする中国において、非常に画期的な思想であった。それは児童文学、児童教育を越える意味をもち、児童を「人間」と認めることによって、前近代の封建社会を批判する「人間本位」というヒューマニズム思想の重要な一環となったからである。

## 結び

以上のように、周作人は初期の児童文学研究において、文化人類学のような欧米の近代文化理論を受容しただけでなく、明治後期から大正初期にかけて日本の児童研究や児童文学が盛んになっていく時期にその思想を吸収した。彼は高島平三郎、黒田鵬心などの日本の知識人や小林一茶などの諸文人から大きな影響を受け、日本文学や児童に深い理解を示す諸文学の「人情」、「趣味」にも強い関心を向けた。換言すれば、周自身も述べているように、彼は西洋から論理的な知識を得たのに対して、日本からは情感的なものを得たのである。

しかし、中国の周作人研究は、周の児童文学論における日本からの影響とされる「人情」や「趣味」という言葉の意味内容に深く踏み込んで究明していない。本稿は、周作人が理解していた「人情」とは人間の自然な感情をそのまま表現することを意味し、児童文学における「趣味」とは児童自身が感じる「おもしろさ」であること、そしてそこに「無意味の意味」があると考えられていることを明らかにした。また、周のいう「人情」の意味を理解することにより、彼が一茶に関心を寄せた理由として一茶の作品に彼の「児童本位」観と同様な思想があることを指摘した。

児童教育において個性を重視する周作人の教育理念は、明治後半から生じる日本の個性尊重主義的児童教育思潮、この思潮に付随した日本児童文学の動向特に童話の成立の影響を受けており、その結果として彼は児童の心理的・精神的発達のために、児童文学の重要性を認識し、童話研究などの児童文学研究を始めた。彼が受けたその影響の出発点は、児童文学に関する日中の相違点についての高島の論述であるが、本稿では一茶の児童を愛する父親の情のような「人情」、黒田の「趣味」論なども周の「児童本位」思想の形成に大きな影響を与えていることを主張した。さらに、これらの日本文化の諸要素は封建的家父長制家族を基盤とするそれまでの中国文学には欠如しているものであり、周が中国近代文学に盛り込もうとした重要なヒューマニズム思想の構成要素ともなった。したがって、周作人のヒューマニズム文学思想を考察する際には、「児童本位」という観点に内在する日本からの影響も決して見逃してはならない。

## 注

- 1 陳泳超 (2000. 11) 「周作人的兒童文學研究」『求是學刊』、第 139 期 6 号
- 2 李瑾 (2013. 5) 「紹興時代の周作人の兒童觀」伊藤徳也編『周作人と日中文化史』、アジア遊学 164、勉誠出版
- 3 劉軍 (2010) 『日本文化視域中的周作人』上海文芸出版社
- 4 潘秀蓉 (2010. 3) 「1920 年代の中国における日本文化の研究について——周作人の日本古典の翻訳紹介を中心に」『日本研究教育年報 14』、東京外国語大学
- 5 原文：「個性差異，本于遺傳，家族影響又有以順成之，故造成性格，重在家庭，後此教育」（「家庭教育一論」『周作人散文全集 1』、広西師範大学出版社、2009 年、254 頁）
- 6 李瑾の「紹興時代の周作人の兒童觀」（『周作人と日中文化史』105 頁）で使用されている言葉。李は周作人の「原人」をこのように訳している。
- 7 周作人 (1913. 8) 「童話研究」『周作人散文全集』262～263 頁、広西師範大学出版社、2009 年
- 8 周作人 (1913. 11) 「童話略論」『周作人自編文集 兒童文學小論』河北教育出版社、2002 年、8 頁に収録。さらに、後の趙景深との「童話討論」（1922 年）にも言及している。
- 9 周作人によると、人為童話は文人が著したものである。これに対して自然童話は民族童話ともいえ、自然に成立したもので、民族ごとの特色があると説明している。
- 10 周作人 (1917. 4) 「アンデルセン」（「安兌爾然」）『周作人散文全集 1』491～492 頁、広西師範大学出版社、2009 年
- 11 周作人 (1922. 4) 「ワイルドの童話」（「王爾徳童話」）『周作人自編文集 自己的園地』65 頁、河北教育出版社、2002 年
- 12 周作人 (1922. 3) 「不思議の国のアリス」（「阿麗思漫遊奇境記」）『周作人自編文集 自己的園地』56 頁、河北教育出版社、2002 年
- 13 周作人 (1922) 「兒童的書」『周作人自編文集 自己的園地』110 頁、河北教育出版社、2002 年
- 14 周作人 (1923. 8) 「関与兒童的書」『周作人自編文集 談虎集』297 頁、河北教育出版社、2002 年
- 15 原文：「兒童沒有一個不是捋物教的、他相信草木能思想、貓狗能說話、正是當然的事。」（「兒童的文学」『周作人自編文集 兒童文學小論』39 頁、河北教育出版社、2002 年）

- 16 飯倉昭平 (1966. 11) 「初期の周作人についてのノート (1)」『研究』38号、191頁、神戸大学
- 17 小山静子 (2002) (『こどもたちの近代』104頁、吉川弘文館、) によると、西洋近代教育思想を紹介するために、マレソンの『家庭教育原理』(1891、明治24年)、ルソーの『児童教育論』(1897、明治30年)等が翻訳される一方、日本の知識人も、小池民次・高橋秀太『家庭教育』(1887、明治20年)、新治吉太郎『通俗家庭教育』(1899、明治32年)、高島平三郎『家庭教育講話』(1903、明治36年)、大村仁太郎『家庭教師としての母』(1905、明治38年)など数々の教育専門書を著した。
- 18 周作人 (1964) 「我的雑学 拾遺丑」『知堂回想録下』767頁、河北教育出版社、2002年、
- 19 李瑾、前掲論文、103～105頁を参照。
- 20 李瑾が前掲論文で述べたように周作人は「ちょうど日本の児童文学の過渡期に遭遇している」(104頁)
- 21 周作人著、常春編集 (1996) 『周作人日記上』418頁、大象出版社。1912年10月3日の日記により「晴得東京寄朝日新聞。」と記している。
- 22 周作人 (1964) 「我的雑学 拾遺丑」前掲書、767頁
- 23 劉軍の前掲書によると、この著作は日本児童文学の歴史的発展の経緯を正確に把握している。
- 24 周作人 (1923. 2) 「歌詠児童の文学」『周作人自編文集 自己的園地』94頁、河北教育出版社、2002年
- 25 周作人、前掲書、94～97頁
- 26 高島平三郎 (明治43) 『児童を謳える文学』14～15頁、洛陽堂
- 27 中村編の『一茶選集』出典不明。
- 28 周作人 (1923. 2) 「俺的春天」『周作人自編文集 自己的園地』98頁、河北教育出版社、2002年
- 29 韓玲姫 (2011. 12) 「周作人における小林一茶の受容——「蠅」を中心に」『中国研究月報』第65巻第12号
- 30 「日本之俳句」(1916. 6) 『若社従刊』3号に掲載。
- 31 原文：「俳句に芭蕉及無村作為最勝、唯余尤喜一茶之句、写人情物理、多極輕妙。」(「日本之俳句」鐘叔河編『日本管窺』、湖南文芸出版社、1998年、232頁)
- 32 原文：「他的俳諧是人情的、他的冷笑里含着熱淚、他的對於強大的反抗與對於弱小的同情、都是出于一本的。」(「一茶的詩」前掲書、264頁)
- 33 渡邊弘 (2006) 『小林一茶の研究』516頁、東洋館出版社

- 34 小林一茶（昭和 51）『一茶全集 6』147～148 頁、信濃毎日新聞社
- 35 周作人（1923. 2）「歌咏児童の文学」『周作人自編文集 自己的園地』94～97 頁、河北教育出版社、2002 年
- 36 『日本国語大辞典』日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編、第二版、「人情」の説明を参照。
- 37 周作人は第七十二段と述べているが、紹介したのは第百五十一段の児童に関する描写である。
- 38 周作人（1925. 9）『日本俗歌六十首』訳序 新潮社から出版。以前『日本俗歌四十首』と『日本俗歌二十首』を発表した。
- 39 周作人（1925. 4）『徒然草』抄 月刊『語糸』22 号に発表。
- 40 周作人（1926）『狂言十番』北新書局から出版。
- 41 周作人は東京留学中、時々落語に聞きに行くこともあり、江戸庶民文芸の川柳、落語などに関心を持つようになった。
- 42 周作人（1936. 2）「幼小者之声」『苦竹雜記』上海良友印刷公司から初版）に収録。筆者は、同著新版（河北教育出版社、2001 年）を使用した。
- 43 同書新版から引用 121 頁
- 44 原文：「我知道柳田对于兒童与農民的感情比得上任何人、他的同情与憂慮都是实在的」（前掲書、123 頁）
- 45 周作人（1925. 1）「日本的人情美」『語糸』に発表、後『雨天的書』（1931）に収録。
- 46 内藤湖南が著した『日本文化史研究』における忠孝論、辜鴻銘の日本の尚武精神を称揚する講演に対して、周作人は日本の「人情美」を提示した。因みに、潘秀蓉の前掲論文では、周が芳賀矢一の著した『国民性十論』の一つ「忠君愛国」に反対していたことについて詳しく論じている（130～131 頁）。
- 47 周作人（1935. 5）「日本管窺」『国聞週報』に発表、後『苦茶隨筆』に収録。鐘叔河編（1998）『日本管窺』19 頁、湖南文芸出版社
- 48 周作人（1918. 12）「人的文学」『周作人散文全集 2』、広西師範大学出版社、2009 年、86 頁。＜増田渉編（1963）『五・四文学革命集』318 頁、平凡社、増田渉、服部昌之訳。＞
- 49 黒田鵬心：明治 18 年生まれ。美術評論家として活動し、大正 5 年『趣味之友』を創刊。同年月刊雑誌『児童』の編集を担当。
- 50 黒田の文章「遊戯と教育」の発表誌は不明。
- 51 「美育」：黒田は「美育」を児童教育における知育、徳育、体育と並べて、「趣味の教育」と呼ぶ。当時の中国において、「美育」は蔡元培により提出され



た基本的教育内容の一つであり、児童の審美意識を養成する教育である。1912年、蔡の『对于新教育之意見』で「美育」がはじめて基本教育方針の中に定められた。

- 52 黒田鵬心『人生と趣味』、誠文堂書店、1920年。
- 53 周作人(1924)「笠翁与随园」『周作人自編文集 苦竹雜記』、河北教育出版社、2002年  
日本語訳は、湯麗敏(2001.3)「周作人と中国新文学」(人文社会学部紀要1号、152頁、富山国際大学から借用)。
- 54 劉軍も「趣味」について論及しているが、彼は黒田の趣味教育を周作人の「趣味」観へ直接移して理解しており、両者の相違点に詳しく言及していない。
- 55 原文：「我相信精魂信仰(Animism)与王帝起源等事尽可做成上好的故事、使兒童得到趣味与实益。」(「関与兒童的書」『周作人自編文集 談虎集』、河北教育出版社、2002年、299頁)
- 56 原文：「我很不要看、——因為題目看不懂、沒趣味。」(「関与兒童的書」前掲書、同頁)
- 57 原文：「覺得很有趣味、甚希望中国也有一兩種這樣的書、足供家庭及学校之用。」(「兒童劇」『周作人自編文集 自己的園地』、河北教育出版社、2002年、104頁)
- 58 原文：「理想的兒童劇固在兒童的自編自演、但一二参考引導的書也不可少、爾且借此可以給大人們一個具体的說明、使他們能夠正当的理解 尤其重要」(「兒童劇」前掲書、104頁)
- 59 坪内逍遙(大正11)『家庭用兒童劇』189頁、早稲田大学出版部
- 60 周作人(1925.4)「徒然草」抄『語糸』に発表、鐘叔河編『日本管窺』329頁、湖南文芸出版社、1998年
- 61 周作人(1923.3)「日本の小詩」『晨報副刊』に発表、『周作人自編文集 芸術与生活』124頁、河北教育出版社、2002年
- 62 周作人(1936.7)「談日本文化書」『自由評論』に発表、鐘叔河編、前掲書、58頁
- 63 原文：「因為我相信童話在兒童教育上的作用是文学的爾不是道德的。」周作人「童話的討論」(1922. 1. 25、2. 12、3. 29、4. 9)『晨報副刊』に発表、陳子善・張鉄榮編『周作人集外文上集』376頁、海南國際新聞出版中心、1993年
- 64 原文：「我們对于教育的希望是把兒童養成一個正当的『人』、爾現在的教育却想把他做成一個忠順的国民、這是極大的謬誤。」(「関与兒童的書」前掲書、297頁)

65 李瑾 前掲論文、98 頁

66 原文：「原父子之倫，本于天性，第必有对待，有調合，而后可称。」（「兒童問題之初解」『周作人散文全集 1』、広西師範大学出版社、2009 年、246 頁）

67 高島平三郎（明治 43）『兒童を謳える文学』、洛陽堂、14 頁

68 周作人（1913. 8）「童話研究」『周作人自編文集 兒童文学小論』22 頁、河北教育出版社、2002 年